



鳴門教育大学大学院の特徴

1.

学内外で国際協力

さまざまな国からの留学生や海外経験の豊富な教員・学生と切磋琢磨できる。JICAの技術協力プロジェクトなどに関連した教員の海外出張同行など、海外での研究調査活動やボランティア活動への参加機会も多い。

2.

地球規模の国際交流

これまで62カ国、1,000名を超えるJICA研修員を受け入れており、学生は年間約5回のJICA研修に参加し海外の教員との交流ができる。英語だけでなく、仏語、スペイン語、アラビア語に対応した研究調査活動ができる。

3.

教育資格取得のメリット

教育学修士号はもちろんのこと、所定の単位で教員免許や日本語教師養成プログラム修了証明書なども取得できる。JOCVをはじめ社会人経験者が、大学院で教員免許を取得して国際教育関係の仕事に就くケースも多い。



学生さんに聞きました!

途上国の格差を教育面から支援

国際協力に高い関心を持ち、世界の格差を教育面から埋めたいと思い、教員になりました。でも子どもたちに、途上国について伝えることの難しさを痛感。まず自分が現場を知らなければと気づき、青年海外協力隊に参加して、ボリビアで小学校の算数教育に携わりました。ただ現地の指導方法で改善点がいくつも見られたので、日本の指導法を現地の文化・習慣に合わせアレンジして取り入れました。その成果を数値で見せると、多くの先生方に賛同していただきました。

現在はまだ道半ばですが、子どもたちの努力を褒めたときと結果を褒めたときに、どのような心理面の変化が出て学力の差が生じるかを研究しています。それをもとにボリビアの先生に向けた教育ガイドブックや、使いやすい教材などの提供につなげ、現地の子どもたちに「学ぶ楽しさ」を伝えていきたいです。

高濱 牧子さん
学校教育研究科
修士2年



取得可能な学位：修士
定員：修士120人／専門職学位180人
学費：入学科28万2,000円、授業料53万5,800円（年額）
奨学金：あり
所在地：〒772-8502 徳島県鳴門市鳴門町高島字中島748番地
TEL：088-687-6131
MAIL：nyushidaigakuin@naruto-u.ac.jp
HP：https://www.naruto-u.ac.jp/（国立大学法人 鳴門教育大学トップページ）
https://www.naruto-u.ac.jp/schools/global/（グローバル教育コース）



国際協力を学ぶ



大学で受け入れたJICA研修のフォローアップでジブチの小学校を訪問

座学に終始しない
実践的なカリキュラムで
世界の教育現場を肌で実感

鳴門教育大学大学院

学校教育研究科

国立大学法人鳴門教育大学大学院では、2019年度から新たに「グローバル教育コース」を開設。同コースではこれまで学内で培ってきた教師教育分野での多様な国際協力・国際交流の経験を活かし、文化的多様性への対応能力に優れ、主体性を持ち教育課題に取り組む「世界から学び、世界とともに考え、世界で教える人材」の育成を目指す。

コースに在籍する学生のうち留学生が3分の2を占めており、アジア、アフリカ、大洋州など、出身国もさまざま。クラスに一人でも留学生がいれば授業は英語で行う。英語に自信のない日本人学生も授業を通じて能力強化ができるように工夫されている。

また同コースで学ぶメリットには、理論に実践も交えて学べる事が挙げられる。海外での研究調査やボランティア活動などは自由に参加でき、そこへ自分の研究も兼ねて長期に現地滞在することも可能だ。さらに教員養成大学である

ことから教員免許のほか「日本語教師養成プログラム修了証明書」も取得することができる。卒業後に国際教育の場に出るために、大学院で資格取得を考える学生も多い。

国際教育の醍醐味には、セオリーがなくその時々で学び、解決課題に向き合う必要があると、石坂広樹准教授は話す。現地の教育方法はそれぞれ違うが、それを「自分の文化圏と違う、新しい発想を学べる」という喜びに変えていく。そんなグローバル視点を持った教員養成が狙いだという。



石坂 広樹先生
人間教育専攻
グローバル教育コース
准教授

国際教育協力・国際理解教育が専門。アジア・アフリカ・中南米など約30ヶ国で国際協力に携わっている。

青年海外協力隊の経験を 教育現場に

鳴門教育大学大学院
学校教育研究科 修士課程1年
教科・領域教育専攻 国際教育コース

高濱 牧子さん

新たな教育者の姿を目指して

大学卒業後に小学校で教鞭をとっていましたが、自らが途上国経験なしに子どもたちに世界の現状を伝える難しさに直面し、国際協力の現場に行こうと青年海外協力隊に参加しました。南米のボリビアに小学校教育隊員として派遣され、現地の小学校で算数教育の改善などに取り組んでいました。

その活動終盤に、国際協力機構(JICA)の草の根プロジェクトの専門家として派遣された鳴門教育大学の石坂広樹准教授に出会いました。現在の指導教員で、この時、一緒に算数のワークショップをする機会をいただきました。ワークショップでは確かな数値で教育の改善方法を示したところ、参加した8割の現地の先生方がその方法を取り入れてくれました。

その経験から学術的に途上国の教育の改善方法を示す重要性を実感し、大学院進学を決めました。現在は、多くの途上国の教育現場がテストの点数のみで子どもたちを評価する傾向にあることに疑問を持ち、子どもたちに対してテストの点数など定量的評価を褒めることと、学習の過程などの定性的評価を褒めることで、彼らの学力と心理面の自己効力感の向上にどういった差が生じるのかを研究しています。

鳴門教育大学では、日々の学び以外にも教育分野に関心のある留学生やJICAの研修でこられる各国の教育関係者と触れあう機会があり、彼らの目線で見えた日本の教育についても学べます。さらに、大学が取り組んでいる途上国でのプロジェクトに同行し、国際協力の現場に行く機会が多いことがとても魅力的です。この1年間で既に4か国へ行く機会があり、来年度もボリビアに渡航予定です。

大学院卒業後は、日本の教育現場と途上国での教育の専門家としてのキャリアを積むことができる働き方を考えています。

鳴門教育大学大学院
学校教育研究科 修士課程1年
教科・領域教育専攻 国際教育コース

板垣 暁歩さん

サモアに恩返しができる教育の専門家に

青年海外協力隊でサモアに理数科教育隊員として派遣され、JICAの教員研修のプロジェクトに参画しながら、現地の中学校でも理数科教育を行いました。しかし、当時は日本での教育現場の経験がなく、自分がサモアに本当に貢献できたか疑問を抱えながら帰国しました。

帰国後は、教育現場で経験を積むべく高校で教員として働くことにし、いずれサモアに教育分野で貢献したいと考えていました。とはいえ、なかなか日本にいながらサモアとの接点を持てずにおり、教員として5年間勤務した時に、妻の勧めで鳴門教育大学の説明会に参加しました。

そこで、在籍中の協力隊経験者の話や研究科の「教育の専門家養成」という目的が、自分の教育に対する考えや協力隊経験からの思いと合致し、進学を即決しました。

現在は、数学の授業のなかに協同的な授業法を導入することで、子どもたちの学力の向上や学習意欲の向上につながるのかを研究しています。大学院に入学してから多くの先行研究や現在の数学教育のトレンドを学ぶ中で、研究テーマにあげた「協同的学習」が有効だと先進国で言われていることを知りましたが、自らサモアで見た教育現場では、テストの点数を上げることに必死になっているのが現状でした。この21世紀型の教育が先進国だけのことなのか、サモアなどの途上国にも対応できることなのか、その可能性を探っていきたいと思っています。

協力隊でお世話になったサモアに教育分野で恩返しできる日を目指して、鳴門教育大学で教育に熱意を持つ国際色豊かな留学生と共に、さまざまな視点から教育についての見識を深めていきたいと思っています。



大学の国際化 最前線

開発途上国での研究機会を重ねて 教育の専門家を育成

鳴門教育大学大学院 人間教育専攻 グローバル教育コース

2019年度より新大学院を開始

8年連続教員就職率全国1位の実績を誇る教師教育の名門・鳴門教育大学は、開発途上国の人材育成にも豊富な実績を有する「大学の国際化」のフロンランナーだ。国際協力機構（JICA）と連携して、1999年に南アフリカの教員を研修員として初めて受け入れたのを皮切りに、2005年には「教員教育国際協力センター」を設置。途上国の教員研修に組織的な取り組みを展開してきた。現在まで62カ国1,000人を超える短期・長期のJICA研修員を受け入れている。

そんな同大学の大学院では、2019年度から新たに「グローバル教育コース」を開始する。研修員の受け入れ経験を生かして、2008年から「国際教育コース」で日本人学生・留学生双方を対象に途上国の教育開発の未来を担う国際教育協力の専門家育成に注力してきた同大学院だが、昨今の日本への留学生増加などを受けて、コースを進化させる形だ。

具体的には、従来の国際教育協力の分野に、日本語教育・日本文化分野、英語コミュニケーション・異文化理解分野、国際理数科教育分野を加えて再編する。「世界から学び、世界とともに考え、世界で教える人材」をスローガンに掲げ、より実践的な学びを提供し教育現場と海外で活躍できる専門家を育成する方針だ。

積極的に開発途上国の現場へ学生を

鳴門教育大学では、開発途上国から研修員を受け入れるにあたって学内予算も投入して相手国についての資料収集や現地調査を丹念に行い、研修内容の質を高めてきたほか、研修後もフォローアップとして現地調査などに出向くなど、「鳴門教育モデル」を確立させてきた。その結果、2017年にはモザンビーク教育大学と大学間交流協定を結ぶまでに至っている。

だが、興味深いのは、こうした現地調査に大



鳴門教育大学で受け入れた研修コースのフォローアップに
大学院生も教員と同行レジブチの小学校を訪問した

学院生も同行させてフィールド研究の機会を提供している点だ。JICAの青年海外協力隊事業とも連携して、ジャマイカに短期ボランティアとしても学生を派遣したり、大学がボリビアで行っている草の根事業などにも学生を同行させたりしている。学生が開発途上国の

現場に赴き、開発プロジェクトや相手国の教育関係者と接する機会を積極的に作りだしているのだ。

今後、「グローバル教育コース」ではこうした取り組みをさらに加速させる。小澤大成教授^{ひろあき}は「教育分野で国内外にこだわらず教室レベルの現場のことを理解しながら、大きな教育の枠組みの改善などに取り組めるグローバルな人材を輩出していきたい。大学の予算を割いてでも積極的に開発現場に学生を連れていくことには大きな価値がある」と思いを語ってくれた。